



支援者に囲まれて万歳をする山尾順紀氏(中央)  
 =13日午後9時48分、新庄市五日町の選挙事務所

# 実績と公約評価

## 新庄市長に 山尾氏3選 知名度で差つける

13日に投票が行われた新庄市長選は、現職の山尾順紀氏(63)が新人の渡部泰山氏(65)を下して3選を果たした。山尾市政の継続が刷新かが問われ、8年ぶりの選挙戦となった今回の市長選。有権者は財政再建を進めた山尾氏の実績と豊富な行政経験に裏打ちされた堅実な公約を評価し、今後4年間のかじ取り役を託した。11、12面に関連記事

山尾氏の陣営には序盤、安泰ムードが漂って動きが鈍かったが、組織の引き締めが奏功。抜群の知名度を生かし、全域で優位に戦いを進めた。また、今回初めて自民、公明両党の推薦を受けた。出陣式や決起集会には地元議員らが顔をそろえ、運動最終日には大沼穂参院議員も街頭でマイクを握った。両党の組織力と従来の後援会がかみ合い、盤石の態勢を構築した。安保関連法案をめぐる

与野党が対立する国政の影響を懸念し、一部に「政党色は抑えるべきだ」との声もあったが、山尾氏本人も中央とのパイプの太さを強調。新庄最上定住自立圏の中心市として「市政運営には与党の協力が必要」との訴えが実を結んだ。一方の渡部氏は年明けから自身が共同代表を務める「明日の新庄を考える会」の集会を重ねた。選挙戦では市議3人の支援を受けた

ほか、同級生や高校教諭時代のネットワークを生かし、草の根戦術を徹底した。だが、正式な出馬表明が7月25日と遅れ、有権者への浸透に苦戦。元県議の伊藤誠之氏や8年前の市長選で山尾氏に敗れた元副市長の八鍬長一氏を選対本部の要職に据え、急ピッチで態勢を構築したものの、街頭や演説会で自身の政策を語る場面は少なく、知名度不足は最後まで解消できなかった。

山尾氏は有権者の信任を得たが、市政には「待ったなし」の課題が山積。閉塞(へいそく)感打破を求める市民の中に、新たな事業展開を求める声もある。財政状況は改善されたとはいえ、予算には限りがある。人口減少が進む中、市民が夢と希望を持てる新庄をどうつくるのか。山尾氏が描く将来展望と、その手腕に有権者の注目が集まる。

(新庄支社・菅原武史)